家族の神話からの脱出
―― プルースト作品研究 ――

村　田　知　子

目　次

1　母と息子と恋人たち
2　スワンの持つ二面性
3　「就寝の悲劇」の意味
　a　加入式としての「就寝の悲劇」
　b　アブラハム，イサク，サラ
　c　『捨て子フランソワ』
4　結　論

1　母と息子と恋人たち

『失われた時を求めて』の特徴の一つは，この小説が様々な要素を含んでいることであろう。内容の多様さの源泉となっているもの，それは語り手であり同時に主人公ともなる話者，Ｊｅの存在である。この小説の一部は話者を主人公とする物語であり，彼は作家になりたいという希望を持ち，女性たちや色々な土地に憧れを抱き，また社交界にも入ってゆく。そして主人公として物語を生きながら，彼は同時に話者として全ての事柄を観察，分析し，語るのである。もちろん実際にはこれら二つの部分は互いに複雑に絡まり合っているわけだから，このように二分することはかなり乱暴であるには違いない。しかしながらあえてこのように分類し，ここでは前者の「話者を主人公とした物語」を，話者と女性たちの関係の変化に注目して分析することによって，この作品の持つ構造の一つを明らかにしてみたいと思う。

話者をめぐる女性たちは大きく二つに分けられる。第一は「母」のグループで，母，祖母，叔母など，家族内の女性たちで構成される。第二は話者を魅惑する女性たちであり，話者が接近するとしないとに拘らず，「恋人」と名付けることができ

よう。そこにはジルベルト，アルベルチーヌ，ゲルマント夫人，あるいは牛乳売りの娘など，多くの女性が含まれる。これまで，話者と母，話者と恋人という二項関係がしばしば考察の対象となってきたのに対し，話者と母，そして恋人という三項関係はあまり問題にされていないように思われる。話者と母の問題は一般に作者と母の問題に重ね合わされ，そこに母への固着を見ることに終始している。一方，恋人（特にアルベルチーヌ）と話者の関係は恋愛心理の分析として読まれることが多い。しかしながら筋の展開の中にこの三者を置いてみると，これらは互いに決して無関係ではないようである[1)]。

話者をはさんで，「母」と「恋人」はどのような関係にあるのか。また，この関係は固定的なものなのか，それとも物語の進行に沿って変化してゆくのか。本論では以上のような視点に立って，≪Combray≫（*Du côté de chez Swann*第一部）の分析を試みたいと思う。

≪Combray≫の分析に入る前に，それまでの作品に描かれた三者の関係を拾ってみよう。

まず『楽しみと日々』ではどうか。最初の短篇『バルダサール・シルヴァンドの死』の結末で，死を目前にしたバルダサールが自分の一生を回想する。その中に次のような一節がある。≪Il revit le grand tilleul sous lequel il s'était fiancé et le jour de la rupture de ses fiançailles, où sa mère seule avait su le consoler.[2)]≫婚約が破棄された時，彼をなぐさめることができたのは母だけだったという記述を，母・主人公・恋人の関係にあてはめるとどうなるか。結婚は母から離れること，母を捨て恋人を選ぶことである。バルダサールは一旦恋人を選ぼうとしたが，結局母のところへ戻る。婚約が破棄されたから母が慰めてくれるのではなく，母に慰めてもらうために婚約を破棄したのだとも言えよう。

もう一つの短篇『一少女の告白』では，意志の欠如ゆえに堕落した生活を送っている少女が，母の望みだと聞いて結婚を決意する。婚約の祝いの日に，彼女は酒の勢いで昔の男友だちと再び快楽にふける。その場面を偶然目にした母は倒れて死んでしまい，娘は後を追って自殺する。この話は主人公が女なので，母・息子・恋人のエピソードではない。しかし母と子を離すものとしての結婚のテーマをそこに見ることはできよう。結婚に焦点を絞ってみるとどうなるか。母は娘に結婚を勧め，一応それに従った娘は，結婚を前にして以前の状態へと後退する。こうして結婚，すなわち母と子の別離の試みは失敗し，母と娘に死をもたらす。

この二つの例から『楽しみと日々』における母・息子・恋人の関係については次

のように言える。第一にそこでは結婚が人生の大きな義務，通過儀礼としての意味を持っている。それは母からの別離，独立である。第二に結婚の成功例が描かれていないこと，またその原因としては母の子どもへの支配力が強いことが挙げられよう。

次に『ジャン・サントゥィユ』では，母・息子・恋人の関係として，マリー・コシシェフとジャンの仲を両親が裂くというエピソードが挙げられる。この物語には他に，ジャンの既に恋愛関係にある女性への嫉妬の分析などは見られるが，そこに母は登場しない。またジャンが「恋人」に心引かれてゆく場面はこのマリーの話以外にはない。従って母と恋人はここでも主人公を中心に対立関係にあると見てよいだろう。

ジャンは両親とよく口論をするが，ある時怒りに任せてヴェネチアグラスを割る。そのあと，母の古いコート，さくらんぼ色のサテンと貂の毛皮の裏がついている黒ビロードのコートに包まれることで心が静まると，ジャンは両親に許しを乞う。黒いビロードのコートは明らかにジャンが母に対して抱くサディックでエロチックな妄想を示している[3)]。母はジャンを許し，ヴェネチアグラスを割ったことについても，それをユダヤ教の結婚儀式における夫婦の「不滅の契りの象徴」にたとえる。従ってここでは母が恋人の位置を占め，ジャンは母と結婚する。結婚本来の機能，母との別離は働かないままに終ってしまう。

両親への反抗に満ちている『ジャン・サントゥイユ』に比べ，『失われた時を求めて』（以下『失われた時』と省略）にはこの要素はほとんど見られない。両親と話者の最大の対立は ≪Combray I≫ に描かれた「就寝の悲劇」のエピソードであり，それ以降，話者と両親の意向がくい違うことがあっても，大きな対立にまでは発展しない。また，「恋人」(話者が憧れる母以外の女性)の禁止はほとんどないが，一つ間接的な形で見られるのは，アドルフ叔父の愛人＝ばら色の服の婦人（後のスワン夫人）のエピソードである。息子が叔父の家でこの女性に出会ったことを知ると，話者の両親は彼との交際を断ってしまう。言いかえれば話者と「恋人」つまりばら色の服の婦人を離すための禁止が，ここでは叔父と両親の仲を分断するのである。

このエピソードは ≪Combray II≫で，昔の思い出として語られるのだから，≪Combray II≫ 自体には「恋人」の禁止はない。ジルベルトと話者の出会いは何ら騒ぎをひきおこさないし，ゲルマント夫人を見に教会へ行くように勧めるのは母である。≪Combray I≫ の「就寝の悲劇」で，話者の母に対する強い愛情もしくは

依存と，それがひきおこす親子の対立が描かれたのに対し，≪Combray II≫では話者の関心は主に「恋人」たちに向いている。何がこの変化をもたらしたのだろうか[4]。以下の部分では，この理由を「就寝の悲劇」の分析によって明らかにしたいと思う。

2. スワンの持つ二面性

≪Combray≫は家庭の和合という神話を描き出している。父の優位は晴雨計による天候の把握や，方向感覚があることによって示される。夜の散歩の時に，突然父が立ちどまって母に尋ねる。「ここはどこだろう。」母には見当がつかない。父は肩をすくめて笑い，そこが実はわが家の庭の裏木戸であることを教える。母は感心して言う。「すばらしい人ね。」父の優位はこのような卑小な形で表わされ，またそれが母の気づかいで支えられていることが明らかにされる。≪Mon père haussait les épaules et il examinait le baromètre, car il aimait la météorologie, pendant que *ma mère,* évitant de faire bruit pour ne pas le troubler, *le regardait avec un respect attendri, mais pas trop fixement pour ne pas chercher à percer le mystère de ses supériorités.*[5]≫ （強調筆者）このようにして，優れた力を持つ父，愛情をもって父を支えつき従う母，両親に服従する子どもによって築かれる家族の調和という神話が創作される。祖父母，大叔母，祖母の妹たちという他の構成人員たちも，この「父－母－子」というコンブレーの基本構造にとり込まれる。従って話者はただ一人の子どもとして家庭の幸せに浸っているように見える。

この平和を乱すのは夕食時の客，スワンである。彼が来た晩話者は母からお休みのキスを受けずに一人で寝室へ行って眠らなければならない。話者はこれに不満を抱き，スワンが訪れたある晩反抗を企てる。寝室に追いやられた彼は罰せられるのを覚悟の上で，母におやすみを言いに来てほしいと伝言する。これが拒否されると今度は母が寝に上ってくるのを待ち，部屋に来てくれとたのむ。話者の反抗は結局父の思いがけない寛大さによって許され，話者は罰のかわりに望み以上のものをもらうことになる。その夜母は一晩中話者の寝室で過ごし，二日早い誕生日のお祝いとしてジョルジュ・サンドの本を彼に与え，その中の一冊『捨て子フランソワ』を読んできかせる。

家庭の平和を乱し，話者に反抗を起こさせる人物，スワンは，ではどのような存在なのだろうか。彼はコンブレーでは何よりもまず，祖父の友人で株式仲買人だった父スワン氏の息子であり，彼もまた父と同じ階層に属していると思われている。ところが実際には彼はフォーブール・サンジェルマンの貴族社会に出入りするジョッキークラブの会員であり，大貴族の親友でさえある。周知のように貴族社会，社交界への憧れはプルースト自身にもその作中人物にも特徴的な傾向である。『失われた時』では貴族階級への憧れは，『ジャン・サントゥイユ』で持っていた「家族小説」的意味合いを失っているが[6]，話者は幼年期からゲルマント家に代表される貴族の神秘にひかれ続ける。このようにプルーストにおいては貴族階級が社会の上位に置かれ，中産階級から貴族社会へ入ることは大きな価値を持っている。従ってスワンは本来のカーストから脱出し，より上位のカーストに入ることに成功した人物だと言えよう。

しかしコンブレーの家庭では誰もスワンのこの正体を知らないし，疑ってみようともしない。自分の所属していたカースト，即ち父のカーストを脱し，上位のカーストに加入することは，コンブレーでは悪だと考えられる。それは父を否定し家族を裏切ることであり，あってはならないことである。それゆえスワンはいつまでもその父の子としてしか認められない。スワンの持つこの隠された面は，父親への造反，父をのりこえることを意味し，スワンはこの叛逆の成功者として，話者の憧れの対象，模範となり得るのである。言いかえればスワンの持つ二つの面のうち，コンブレーの家族の神話にとって望ましい面，即ち父の位置を継承する息子の面だけが話者の家庭に受け入れられる。それに対し，排除すべき面，即ち父を超越し，成上った息子という面は，拒否され，検閲によって除外される。

スワンの持つ属性の中に，コンブレーの家庭から排除されるものが三つある。一つは上に述べた「成上った息子」の面であり，次に挙げられるのは，彼の芸術家，あるいは芸術愛好家の側面である。スワンの持つ絵画コレクションのうちの一枚が，ある日，スワン氏蔵として『フィガロ』に載っても，コンブレーではあまり評価されず，食卓の話題にも登らない。しかし芸術の世界もまた話者の憧れの一つであり，スワンはこの意味でも話者の夢をある程度体現した人物である。

最後の一つはオデットとの結婚である。スワンのコンブレー訪問は，彼がオデットと結婚してからずっと減っている。話者の両親が彼女を迎え入れようとしないからである。なぜオデットは拒絶されるのか，それは彼女が身持ちの悪い女だという評判のせいである。≪Je crois qu'il a beaucoup de soucis avec sa coquine

de femme qui vit au su de tout Combray avec un certain monsieur de Charlus. C'est la fable de la ville.[7] ≫ この大伯母の言葉どおり，オデットは≪Combray II≫でシャルリュスと娘ジルベルトを伴って現われる。そして既に述べたように，彼女はアドルフ叔父の愛人である女優たちの一人，ばら色の服の婦人として示される[8]。話者の両親はアドルフ叔父との交際を断つことで，オデットの持つ「娼婦性」を排除する。ここで「娼婦性」と名付けたものは女性の性愛的な面，肉体的欲望を持つ女性の側面である。この「娼婦性」と対立するのは「母」としての側面であり，それはつきつめれば「聖母マリア」に行きつく「聖なる母」，肉欲をもたない母のイメージである。「就寝の悲劇」の夜，話者の母はスワンの結婚以来生じた気づまりをなくすために，彼にオデットとジルベルトについて話そうとする。≪Nous reparlerons d'elle (= fille de Swann) quand nous serons tous les deux, [. . .]. Il n'y a qu'une maman qui soit digne de vous comprendre. Je suis sûre que la sienne serait de mon avis.[9] ≫ この企ては父によって妨げられるが，この時，母によって認められているのはオデットの母としての側面だけである。このことは，コンブレーにおいて「聖なる母」と「娼婦」の対立が強いことを示している。「聖なる母」としての話者の母は，コンブレーの家庭が具現している「神聖な家庭」の神話を守るために，オデットの「娼婦性」を除去しようとする。そのためにオデットを「母」に格上げしようと計るが，家庭の掟を司る父はそれを認めない[10]。

スワンの妻オデットは以上のように「母」のアンチテーゼ「娼婦」として示される。では，もしスワンがオデット以外の女性と結婚していたら，コンブレーに快く迎えられていたのだろうか。そうではないだろう。なぜなら結婚自体が非難される行為だからである。既に見たように，プルーストの作品においては，結婚は果たすべき義務であると共に，母との決定的な別離である。従って，結婚することで母を捨て，恋人あるいは娼婦を選んだ息子スワンは，オデットと共にコンブレーでは敵視される。彼の結婚は，愛する娘のために踏み切ったのだという形でしか容認されない。「娼婦」オデットが「母」としてなら認められる可能性があるのと同様，結婚したスワン，母を捨てた息子としてのスワンも，それが子どものため，言いかえれば「父」となるためであるのなら許される。つまりコンブレーでは，男－女という性愛的な関係は拒絶され，父－母－子という関係に変質させたあとでようやく受入れられるのである。

以上述べてきたように，スワンはコンブレーの話者の家では否定されたり無視さ

れたりする面を持っている。父をのりこえ成上ること，芸術家となること，母から離れ性愛的な面を持つ恋人と結婚すること。それらは全て≪Combray II≫以降の話者の願望であるが，それらの要素を否定することでコンブレーの平和は成立っている。そこでは父－母－子という関係しか認められない。スワンもこの関係にあてはまる存在としてのみ受入れられているが，実は既にこの関係を抜け出て息子－恋人という性愛的関係に入っている。従ってスワンの存在自体が，コンブレーの家族の神話を破壊する力を持っているといえよう。そのスワンの来訪がひきおこす「就寝の悲劇」もまた，父－母－子という家族関係の神話への反抗なのではないだろうか。

3. 「就寝の悲劇」の意味

a) 加入式としての「就寝の悲劇」

「就寝の悲劇」のあらすじは既に述べたが，このテーマはプルーストの作品に何度か出てくる。例えば『ジャン・サントゥイユ』と『失われた時』の中のこのエピソードを比べてみるといくつか相違点がある[11)]。 第一に『失われた時』では母の拒絶が前作と比べてかなり強くなっている。第二に『失われた時』では父が決定権を持っている。第三に『失われた時』では『ジャン・サントゥイユ』に描かれたお休みのキスのエピソードのあと，プレゼントとして本をもらうという出来事が続いている。

第一の点については，ジャンの母は子どもの求めに応じてすぐに彼の寝室に上ってゆくのに対し，『失われた時』では話者がフランソワーズに頼んだ伝言にも母は答えないし，眠らずに待っていた話者が彼女に直接たのんでも拒絶する。拒絶がこれほど強くなったことは，裏返せば話者が母に求めるものが違ってきたことを示している。『失われた時』の話者はより大きな罪を犯しているわけである。

『ジャン・サントゥイユ』ではジャンが一人で寝室に行かされるのはこれが最初であり，彼はそのために眠れずに母を呼ぶ。だからジャンは簡単に許される。言わば彼は，眠るためには母を必要とする幼児期から脱しようとして失敗し，そこに留まるのである。これに対し，『失われた時』では，客が来た晩には話者が母のキスなしに寝室に行くのは習慣になっていた。従って話者の行為は，まず両親への反抗である。また，夫婦の寝室へ上ってゆく母を，自分の部屋へ連れてゆこうとすると

ころに母に対する性的欲望を見て，そこにオイディプス図式をあてはめることもできよう。しかしながら結局父に許可され，母と寝室へ行ったときには，話者は勇気を出せば母に「ここに寝なくてもいいよ」と言えると感じる。つまりこのエピソードがジャンにとって幼児期に留まることを意味するのに対し，話者にとっては母への執着から脱け出すこと，成長することを意味しているのではないか。従って筆者はそこに加入式 Initiation としての機能を見たいと思う。

加入式の主な特徴は，死の象徴に接することとその体験を通じて新しい能力を得，知者となることである。この二つの要素を最もはっきりした形で示しているのは，『楽しみと日々』の中の『バルダサール・シルヴァンドの死』で冒頭に示されるアレクシスの体験である。アレクシスは13才になったお祝いに馬をもらいに叔父バルダサールに会いにゆく。叔父は死を宣告されており，彼に会うことはアレクシスをおびえさせる。ところがお祝いに馬をもらったあと，ひ弱な少年であったアレクシスは巧みに馬を乗りこなす力強い青年へと成長し，一年後には彼はもはや叔父，つまり死に接することを恐れない。ここに示された13才という年令はユダヤ教でのバーミッバ Bar Mizvah の祝いの年令であり，宗教的に成人したことを意味する[12)]。そして馬はプルーストの作品では明らかに一つのコンプレックスとなっている。馬は死をもたらす危険な存在であると共に，馬を乗りこなすことは男らしさの現われである[13)]。これらのことからアレクシスの物語を次のように要約することができよう。成人すべき年令に達したアレクシスは死に触れ，危険なものを扱うことを習得して強い青年になった，と。従ってこのエピソードは少年から青年への移行，思春期の加入式を意味するのだと言えよう。

同様のことが「就寝の悲劇」についても言えるのではないか。話者は家族から離れて一人寝室に上ってゆき，閉めきった部屋の中で儀式的な埋葬が行なわれる[14)]。≪Une fois dans ma chambre, il fallut boucher toutes les issues, fermer les volets, creuser mon propre tombeau, en défaisant mes couvertures, revêtir le suaire de ma chemise de nuit. Mais avant de m'ensevelir dans le lit de fer . . . [15)]≫ここでの死のイメージは話者の悲しみを表わす比喩以上の強さを持っている。

このようにして加入式の準備段階が終わり，次に聖・死・性についての啓示が行なわれる。[16)] 父は話者に母と一晩を過ごす許可を与えたあと，アブラハムとしての姿を現わす。

Je restai sans oser faire un mouvement; il était encore devant nous, grand, dans sa robe de nuit blanche [. . .], *avec le geste d'Abraham* dans la gravure d'après Benozzo Gozzoli que m'avait donnée M. Swann, *disant à Sarah qu'elle a à se départir du côté d'Issac* [17]. （強調筆者）

ここで父はアブラハム，母はサラ，話者はイサクにたとえられる。アブラハムとイサクの名は直ちに「アブラハムの犠牲」の話を想起させる（死の啓示）。また，アブラハムは神の命に従い神の意志を実行するものである（聖の啓示）。そしてここでのアブラハムの身ぶりは明らかに母と子の離別を命じている。これは話者が母への執着から脱し，「恋人」へと向かわなければならないことを示している（性の啓示）。

以上の点から，この「就寝の悲劇」が少年期から青年期への移行を意味する加入式の体験であることが明らかになった。ここで示された二つの父親の姿，母との離別を命ずる父アブラハムと，母を話者の寝室へ行かせる父は大きくくい違っている。しかし母と過ごしたこのような夜が二度と繰返されないことを話者は知っている[18]。従ってこれから先を支配するのはアブラハムの示した原則，母と子の決別である。ではこの原則と，母と過ごす一夜及び母が読んで聞かせるプレゼント，『捨て子フランソワ』はどのように結びついているのだろうか。この問題を解く前に，ここに引用されているベノッツォ・ゴッツォーリの絵について少し考えてみたいと思う。

b）アブラハム，イサク，サラ

このアブラハムの絵はベノッツォ・ゴッツォーリの作品とされているが，その実在は確認されていない[19]。 宗教的な絵は一般に聖書その他に基いて描かれているから，問題の絵を捜さなくても聖書の中にその場面を見つけることができるはずである。ところがアブラハムがサラに，イサクから離れよと命ずる場面は創世記にはない。ではプルーストはこの場面をどこから作り出したのだろうか。筆者はそこにアブラハムの犠牲のエピソードとハガル・イシマエルの追放のエピソードの重ね合わせがあるという仮説を立ててみたいと思う。ハガルの追放の話は次のようなものである。アブラハムの妻サラは自分にはもう子どもができないと思い，召使いのハガルを夫のもとに行かせる。ハガルがイシマエルを生んだあと，サラ自身にもイサクが生まれる。するとサラはハガル母子を疎んじ，二人を追い出すよう夫に頼む。アブラハムはそれが神の意志に背かないことがわかると二人を追放する。

犠牲のエピソードはアブラハムが神によって信仰を試されるものである。しかしここではイサク＝話者が話の中心であるから，イサクの立場に立ってみると，この話は理由もなしに突然自分を殺そうとする父を描いていることになる。イシマエルは父によって家から追いだされるのだから，イサクとイシマエルは父に虐待される息子という共通点を持っている。また犠牲のエピソードにはサラが欠けているが，追放のエピソードにはサラが登場する。従ってこの二つを重ね合わせたと考えることはそれほど突飛なことではあるまい。

この二つを重ねるとどうなるか。父はアブラハム一人であり，子はイサクとイシマエルである。これら二人は父に虐待される同質の存在であるから，父－子の関係に変化はない。それに対し母にあたるのはハガルとサラであるが，二人は相反する存在である。追放のエピソードにおいてサラは追放を企てる者，ハガルは子どもと共に追放される者である。従って二つのエピソードを重ねた時にできる図式では母がまったく異った二つの部分に分裂してしまう。しかし実はこの分裂した母親像こそが，「就寝の悲劇」における話者の母の姿と一致しているのである。というのは彼女は前半では話者を寝室へと追いやる冷酷な母，つまり追放するサラであり，後半では父から離れて話者と共に寝室へ来てくれる優しい母，ハガルであるからだ。そしてこの絵はまさに冷酷な母から優しい母への転換点に置かれている。このことからこの絵が「就寝の悲劇」の図式を凝縮した形で呈示していると見ることができるのではないだろうか。

追放のエピソードでイシマエルを直接追い出すのは父アブラハムであるが，彼の行為は神の命によって正当化されている。だからイシマエル＝話者の恨みはサラ＝母に向けられる。ここにみられる冷酷な母と優しい母という母親像の分裂は『ジャン・サントゥイユ』に顕著にみられる。そして優しい母を慕う気持ちと冷酷な母を恨む気持ちが，ジャンの両親への反抗をひきおこしているといえよう。≪Combray II≫以降に話者と両親の対立がないのは，その原因である分裂した母親像がこの絵に凝縮した形で示されることによって，この要素が排除されているからであろう。

またハガルの追放の場面は一般に，次のような構図で描かれる。中央にアブラハムが立ち，出てゆけと身振りで命ずる。彼をはさんで一方にハガルと彼女の側で泣くイシマエル，反対側に背をむけた，あるいは幼いイサクを抱いたサラが描かれる。従って母サラから離れよと父に命ぜられてイシマエルが泣いているようにも見える。このことから，ここで使われている絵が「アブラハムの犠牲」ではなく「ハガルの追放」の場面であると推測することができるのではないか[20)]。

c）『捨て子フランソワ』[21)]

加入式を経た話者に母から誕生日のプレゼントとして『捨て子フランソワ』が与えられる。それはアレクシスが馬をもらい，乗りこなすことで強い青年になったように，話者がそれ以後進むべき方向を示し，彼の成長を助ける役目をはたす。この本は二つの特徴を持ち，それらは≪Combray II≫以降の話者の行動を規定する。

第一の特徴はこの本が話者にとって初めて読む長篇小説であることだ[22)]。つまり『捨て子フランソワ』を読むことが話者を文学の世界へと導いたわけであり，その意味でこの夜が話者の探究の出発点となっている。

第二にこれが一人の少年の成長の物語であり，とりわけ主人公と女性との関係に重点がおかれていることである。この小説は従来，母親との結婚の物語であり，話者の母親との精神的決別を阻むもの，あるいは話者の近親相姦的な欲望をある意味で満足させるものとして考えられて来た。しかしむしろフランソワの成長の物語として読むべきではないか。彼とマドレーヌ・ブランシェの関係を考えてみると，最初は子と養母であったのがついには夫と妻になるわけだから，フランソワはこの物語を通じて母を求める幼児から，恋人あるいは妻を求める青年にまで成長したと言えよう。そしてまた二人の結婚が成就するためにはマドレーヌが持つ母としての要素の否定が必要であり，一旦家から追い出されたフランソワが彼女のもとに戻る前にこの条件が満たされる。まず13章ではマドレーヌがまだ十分若く結婚できる年であることが，次に14章では彼の生みの母の生存がフランソワに告げられる。このような過程を経てマドレーヌは母から恋人，妻へと変貌する。従ってこの物語は決して「母との結婚」を示しているのではなく，「少年から青年への成長の物語」だと見るべきだろう。

ではこの小説が母によって与えられたことにどんな意味があるのだろうか。話者は≪Combray I≫ではまだ母への依存から脱し切っておらず，母を求めている。その点で彼もフランソワと同じ出発点に立っているといえよう。父がアブラハムの姿をとって示した，母からの独立という課題はこの時点では話者にとって厳しすぎ，すぐ実行することはできない。そこで母は義務と現状との妥協案として『捨て子フランソワ』を話者に提示したのではないだろうか。つまりこの小説は「母を愛することをやめずに，しかも妻を求める青年に成長することができた幸福な少年の物語」なのである。しかしこの奇跡はフランソワとマドレーヌが本当の親子ではないという理由によって可能となったのである。話者はおぼろげながらそれを感じとり，Champi という言葉に何かこの恋の物語の秘密が隠されていると考える。そしてこ

の小説は話者の，恋人へむけての探究の出発点となるのである。

4. 結　論

このように「就寝の悲劇」は，話者の少年期から青年期への移行を意味する加入式の役割を果たしていることが明らかになった。そこで示された最も重要な事項は「母への執着を捨て，他の女性『恋人』を愛する青年に成長すること」であった。言いかえればコンブレーを支配する家族の神話，つまり父－母－子の関係から脱出し，性愛的な恋人を得ることである。そして既にこの課題をこなした人物，話者の手本としてスワンがコンブレーに配置されていた。ところが母は，『捨て子フランソワ』という妥協案を話者に与えることで，父の示した課題の強制力を弱めてしまった。従って話者は加入式を経たにもかかわらず，母への執着を消し去ることができずに終ってしまう。それゆえ≪Combray II≫以後，話者は母の妥協案に従って，一方で母に対する執着を残しながら，恋人を得ようとするのである。このようにして，女性の問題は文学創作と共に『失われた時』の大きなテーマの一つとなり，話者の心は最後まで母と恋人の間で揺れ動くことになる。

註

1）例えば話者がバルベックで少女たちに接近する間に，祖母の病気が重くなってゆくこと，祖母が死ぬとアルベルチーヌが話者を訪ねてくることなどを考えてほしい。

2）Pléiade 版　*Jean Santeuil*, p.27.

3）≪C'était un manteau de velours noir bordé d'aiguillettes, doublé de satin cerise et d'hermine, qui, meurtri par la violence du coup, entra dans la chambre au poing de Jean *comme une jeune fille saisie aux cheveux par un guerrier.*≫ (ibid. p. 419.強調筆者)

4）≪Combray I≫ の「就寝の悲劇」と≪Combray II≫の間には有名なマドレーヌ菓子のエピソードがある。しかしこれはコンブレーに暮らす少年としての話者にではなく，小説を書こうとする成人した話者にかかわる部分なので本論では考えに入れない。

5) Pléiade 版 *A la recherche du temps perdu* I, p. 11. (以下 R.T.P. と省略)

6) プルーストの作品の持つ「家族小説 roman familial」的性格については, J. T. Rosasco, *Voies de l'imagination proustienne,* Nizet, 1980. 及び D. Fernandez, ≪Proust, fils de personne≫ dans *L'Arbre jusqu'aux racines,* Grasset, 1972.を参照のこと。ただし後者は作品を通して作家プルーストを探る試みであるから, 筆者の立場とはずれがある。

7) R.T.P. I, p.34.

8) 『失われた時』の中には, 娼婦(あるいは娼婦性をもつもの)=女優の系列がある。そこに含まれるのはオデット, ラシェル, ラ・ベルマ, レアたちである。

9) R.T.P. I, p.24.

10) 「聖なる母」と「娼婦」の対立はその後も続き, 後者はコンブレーの家族から極力排除される。例えばブロックは話者の大叔母が娼婦性を持っていると言い, 話者の家から追放される。

11) *Jean Santeuil,* ≪Le baiser du soir≫ p. 202 ～ p. 211.

12) J. Henderson 『夢と神話の世界』河合隼雄 浪花博訳 新泉社, 1974年, pp. 101 ～ 104.

13) 例えばアレクシスの母が大けがをするのも, アルベルチーヌが死ぬのも馬の事故である。またサン・ルーはドンシェールで暴れる馬を静めて男らしさを示す。

14) エリアーデによれば, 加入式は新入者が家族から離されること, あるいは仮に埋葬されることから始まる。 Mircea Eliade, *Le sacré et le profane,* Gallimard, coll. Idées, 1965, p. 160.

15) R.T.P. I, p.28.

16) Eliade 前掲書, p.159. ≪L'initiation comporte généralement une triple-révélation: celle du sacré, celle de la mort et celle de la sexualité.≫

17) R.T.P. I, pp.36-37.

18) R.T.P.II, p. 43. ≪Je savais qu'une telle nuit ne pourrait se renouveler;≫

19) J. P. Richard, *Proust et le monde sensible,* Seuil, 1974, p. 213.

20) この絵が「ハガルの追放」であるという仮定を認めた上で精神分析的な解釈を試みるならば, ここにプルーストの幼年時代の心の傷を認めることもできよう。イシマエルは正式な跡取り息子イサクの誕生によって追放される。アブラハムの家族をプルーストの家族にあてはめるとイシマエルはマルセル自身, イサクは

弟ロベールにあたる。プルーストは父と同様医者になった弟が正当な跡継ぎであり，自分はそうでないと考えていたようである。従って，母が冷たくなったのは，正当な跡継ぎである弟が生まれたためだというプルーストの思いが，この絵に隠されていると見ることができる。

21）テクストはFolio版を使用した。

22）≪Je n'avais jamais lu encore de vrais romans.≫ R.T.P. I，p. 41.